

ジャパンプラズ

NEWS LETTER

Japan Club : 1759 Sutter Street #203, San Francisco, CA 94115 • Tel: 415-931-9424 • www.jpclub.org • jc-sf@sbcglobal.net

7月度理事会報告

ジャパンプラズ20年の歴史 第20回定期総会 開催そして新年度をスタート

ジャパンプラズの7月度理事会は7月12日(土)午後12:30からサンフランシスコ桑港寺ホールを借りて開かれました、上野会長初め10名の理事が出席され、議題に沿って以下の事柄が討議されました。

議題1. 第20回定期総会、準備確認

当日の担当等を含め全て6月の理事会での打ち合わせに基づいて開かれる事を確認しました。

新会員名簿、緊急連絡網地域名簿は定期総会会場での配布に変えてニュースレターに同封する形で7月号に全体名簿と8月号に緊急連絡網地域名簿を郵送配布する予定です。これから一年間使用する名簿です、特に緊急連絡網名簿は電話等のそばに置いて何時でも使用出来る様にしておいてください。

議題2. 創立20年を迎え会の「活性化を図る」取り組みいろいろ

・**テスラ社の工場見学について**、現去る7月2日(水)に6名(テスラ社側より少人数を希望されていたため)の参加者のもと行なわれました、担当者による適切な説明と初めて見る電気自動車工場内は驚きの連続でした。詳しい見学会報告を大隅敏男副会長よりいただきました。(記事参考)

・**さくら学園とのコラボレーションについて**、シュミットまり子理事が先方と連絡を取ってさくら学園創立10周年記念行事の一環として日本文化等を紹介する催しについて我々ジャパンプラズ側から、園児参加型の食べ物作り、同じくお手玉、折り紙あそびなどを提案、先方の意見を聞く事になりました。会員の中で「こんな事(小学生低学年園児を対象とした)が出来ます」と云う様な提案がありましたら歓迎です。同時に学園側にジャパンプラズのB.B.Q.ピクニックへの参加を呼びかける予定です。

・**税金問題講演会については**、今迄集められた質問や提案を元に事務局が講師に会って下打ち合わせの結果、開催は10月18日(土)を第一案として会場等の手配をすすめる事になりました。

総領事館の人事異動 ジャパンプラズの新年会やピクニックに度々参加され会員と親交のあった総領事館領事セクション担当の吉田圭一領事は人事異動で出身母体の財務省への帰任が決まり7月1日ご家族と共に帰国されました。

吉田領事の後任には同じく財務省から片山武宏さんが発令され6月末に着任されました。片山領事は平成11年に財務省に入り今回初めて他省庁に向かうほか初の海外勤務となり、総領事館では吉田領事と同じく領事セクションの担当となり今城康雄領事の補佐役をつとめることになります。

片山領事は徳島県出身、ご家族は夫人と10歳になるお嬢さんの3人、バイエリアでの初めての海外生活を楽しみにしておられる様です。

議題3. その他

・**沖山会計理事**から総会で承認を求め提出され決算報告の原案が説明されこれを出席理事全員が了承しました。

・**8月度理事会** 7月度理事会は**8月2日(土曜日)サンマテオ榴木マーケット2階**に於いて**午後4時**より開催いたします。今期から理事会の開催日が**第一土曜日**に変更になりましたのでご注意ください。

今回は理事会終了後、サンフランシスコ総領事館からの要望で「歴史問題一従軍慰安婦問題」に対する日本政府の考え、施策、これ迄の経過の説明会がありました。総領事館から渡邊信裕首席領事、今城康雄領事、早川領事が出席し説明されました、その後出席者から活発な意見、質問等が出されました。尚この問題については日本の外務省のホームページ、及びサンフランシスコ総領事館のホームページをご覧ください。

ジャパンプラズ・ゴルフ大会



日時: 7月30日(水曜日)午前10時スタート
9時30分までに集合してください
場所: Willow Park Golf Course
方式: ダブルペリア方式

テスラ工場見学“感想記” 大隅敏男

“今市場に出ている車の中で最も安全性が高く、最新鋭電動自動車テスラ”と言う謳い文句につられて機会があれば是非その生産工場を観てみたいとの念願が叶い、去る7月2日に榴木理事の特別取り計らいに依り、6人のジャパンプラズメンバーと共にFremontにある同工場へ見学に行き参りました。

工場の規模: 建坪面積は東京ドームの約5倍の広さとかで一階と2階からなり1階の正面入り口から入ると左手に百人を超えるエンジニアが各自のコンピューターに向かって熱心に開発業務に勤しんでいる姿があり、少し離れた場所に20人程収容出来る会議室が3~4カ所あり、どの会議室でも額を集めて真剣に生産関係会議が行われておる様子が受け取られました。

生産工場内部: 1階は上記エンジニアのセクションを含め、部分品在庫、基本資材(アルミ)プレスセクション、基軸(モーター、バッテリー、車輪、車台支を完備したボデー)生産、ペイント、車体組み立て、そして車体内部配置等の各ユニットが生産過程に従って配備されておりました。

2階は見学対象に入っておらず見る事は出来ませんでしたがやはり1階同様組み立てラインがあるとの事でした。従って我々が見学した場所は建物全体の4分の一であったとの事ですがそれでもその広さには圧倒されました。まるで食べ物のないCOSTCOが何軒も続いている光景でした。(以下裏面に続く)

(1面から続く) **テスラ工場見学感想記**

面白いのは工場内では自転車移動する従業員が繁く見掛けられ、モペットやゴルフカートなどで移動するよりも屋内の衛生管理と従業員の健康管理上からみても成程クリーンカーをモットーとするテスラにとってはごく当たり前の事かと考えさせられた次第です。

組み立てライン: 自動移動機の上に搭載された未完成自動車の車体取り付け、窓ガラスはめ込み、内装設置等は殆どロボテックが作業を行い、各セクションに待機する従業員はロボテックには手の届かない配線業務とか車体内部配置関係業務を行っており時としてロボテックが持ち上げる部分品の検査確認を行ってまいりました。



工場見学の参加者一同

テスラは他社と比べて何が違うのか? 通常GMとかフォード、トヨタ等の大手自動車メーカーは基本的にモデルチェンジを3年か4年に一度車体モデル変更と共に行うが、テスラは車体モデル以外は毎日改良を行っている。技術者の研究で改良する箇所が見付かれれば即改良実行をする。即ち昨日よりも今日の方が、今日より明日の方が優れた生産品が出来るとゆうのがテスラの言い分。次に車体構造が他社の物に比べて遥かに頑丈に出来ており、特に車の前側はエンジンの搭載が無い為、その部分が衝突時のショックアブソーバーになっており、後部に至っても同様の措置が施されておるとの事。更にバイヤーの要求に応じて車体外、内部の色、シートの材料、内装の選択、車輪の選択(サイズが19", 20", 21")等がオーダーメイドとして作られる。皆さん少々お高いのですが1台如何が? 大隅敏男

私のこれからは?

貝沼三枝子 (寄稿)

日本の高齢者の暮らし事情

ご無沙汰しております。2003年日本に戻り早くも12年が過ぎましたが、私達は毎回送って下さるジャパンプラブのニュースを楽しみに拝読し、今も皆様のお仲間のような気持ちでおります。

歳を重ねるに従い、心身共に何らかのトラブルが出てきたのも現実で、いつかは自分の力だけで暮らすことが困難になり、介護が必要になる日もあるのではという思いもチラチラしてくるこの頃です。そこで日本の高齢者の暮らしの事情とその中で自分の思いなどを少しお伝えしたいとペンをとりました。

日本では2000年4月に介護保険制度が始まりました。それまでの高齢者福祉は措置制度(役所がその人の状況を判断しサービスを決め提供するシステムです)によって行われてきました。介護保険制度とは、高齢によって介護が必要になった人が「尊厳」を保たれ、その持っている能力に応じ「自立した日常生活」ができるよう必要なサービスを保険で給付するというもので、措置から保険という契約のシステムに大きく変わりました。それまでの介護は家族の問題とされ、介護の荷を負っていたのは主に女性(特にお嫁さん達)でしたが、女性の社会進出や核家族化などにより、その状況はますます過酷になってきていたのが実情でした。そんな中に誕生した介護保険制度は「介護は社会で支えるもので、これによって介護者(お嫁さんなど)を介護地獄から解放する」をうたい文句に登場、「当事者が、自分の必要とするサービスを自分で選択できるのだ」と、国民は大きな期待を寄せました。

ここで介護保険制度の利用の流れをごく簡単に述べておきます。まず介護保険料を払います。(40歳から65歳までの人は医療保険の保険料に上乗せ、65歳以上の人は基本的には年金天引き)→介護保険サービス利用の前に要介護認定を受けます。(要介護状態に応じて要支援1から要介護5までの7区分に分けられ、それによって利用限度額が決まります。)→ケアプラン(利用計画書)によってサービス利用が始まります。(これは自分でも作れますが、ケアマネジャーが作成して利用者へ提案しているのが現実です。)→サービス利用時には利用者は所得に関係なく利用料として「1割負担」が必要です。

その後、介護保険制度は何度か手直しと改定がなされ、今回2015年3回目の大改定が決まりました。しかし、そのたびに介護サービスの内容の質が落ち、利用者にとっては使いにくく、高齢者のニーズからどんどんかけ離れ、当初の期待は全く裏切られてきています。そのために高齢者やその家族の不安はますます大きくなりました。その主な原因はサービスの利用が想定外に増し、財政が圧迫されてきた為とされています。

一方、介護保険制度開始をきっかけに、人々の考え方にもいくつかの変化が出てきました。一つにはそれまで家族が中心になって支えてきた介護を「保険で給付＝社会で支える」ということが、「介護は社会がするもの」と介護責任を社会に丸投げしてしまうことです。介護はヘルパー達にすべて任せ、家族はかかわる必要はないという考えです。もう一つは、介護保険の中のサービスは基本的には食事、入浴、排せつの介助が主なものなのですが、これだけが介護であり、これで介護を受ける人は満たされるだろうという考え方です。ヘルパーが食事を準備し、お風呂に入れてくれ、おむつ交換ができていれば、ヘルパーと介護を受けている人との間の様子や介護の質には思いを寄せようとしないう傾向もみられます。

しかし、自分が介護を受ける立場になって考えてみると、それで本当に安心でき心の満たされた日々が過ごせるのかと大きな疑問が生じます。時間で限られたヘルパーの世話があれば最低限命をつなぐことはできるでしょうが、それまでの自分の暮らしは一転し、自分らしい日々は色あせたものになります。自分に介護が必要になった時でも、それまでの暮らしが継続できる豊かな生活環境であるために、今からいろいろ考えておく必要があると感じています。

介護とは、必要な世話だけを意味するのではなく、介護する人と受ける人の間に生じる相互に尊敬し合う関係があってこそ豊かなものになるのです。そのためには介護が必要になっても、自分が何を大切にしたいのか、どんな介護環境でいたいのかを伝え、理解してもらえることが大切です。しかし、日本では自分のことを主張するのに不慣れで、特に高齢になり世話を受ける立場になった時には、お世話になるのだからと遠慮しがちですので、自己主張のトレーニングも必要です。

また、自分の望ましい介護環境は一夜にして生まれるものではありません。それまでの生き方や人との関係の取り方が大きくかかわってきます。家族だけでなく近隣や友人関係の中で、共に支えあってきた実績と相互信頼があってこそ、豊かな環境が育ってきます。高齢だからと家族や友人にべったり依存するのではなく、自立と自律を基本に、周囲の人々と共に生きる姿勢をしっかり身に付けていきたいな～、いかなければ!というのが今の気持ちです。

人生の最終章だからこそ、すっかり様変わりしてきた介護保険に振り回されず、たとえ介護が必要になっても、家族や地域の人々と共に知恵を集め、それまでの暮らしの延長上に自然な日々を重ねていく…これが自分のこれからでありたいと思っておりますが、果たして…? (事務局注:貝沼三枝子さんは元ジャパンプラブ会長貝沼禎介氏夫人です)